

■今月の特選句

2018年12月



蓮根掘る電車のやうな連結部

工藤泰子

「俳諧の連歌」は、滑稽を言って、座の参加者を喜ばせた。おそらく笑わせるだけでなく感心もさせたのであろう。連結部とは上手いこと言ったね。



古妻のマグマにビビリうそ寒し

青木輝子

自身のことを詠んだ一句。内部に渦巻いている「マグマ」に気付き愕然としたのだろう。ビビっているのは夫だが、悟りきれない自分を見詰めた句。



この秋思ひどいあげ底ではないか

小林英昭

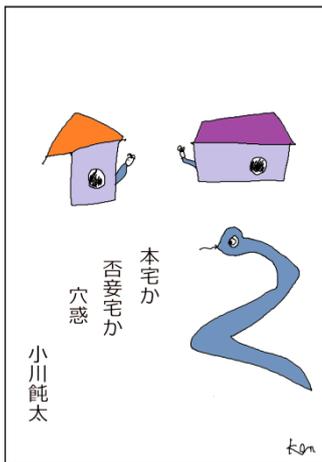
深刻と思っていた懸案事項が思いもかけずあっさりと解決。結局は欠伸一つで終止符を打つことに。難しそうに見えたけど、何だあげ底だったか。



秋晴や婆のプライド杖畳む

井野ひろみ

齡をとると足から弱るから杖を使うことになる。初めのうちは抵抗がある。他者から見られてどうこうじゃない。自分に対して許せないのだ。



本宅か否妾宅か穴惑

小川鈍太

「穴惑」とは、冬眠のための穴が見つからなくてウロウロしている蛇のことを言うと思っていたが、実は別の理由だったとは。ふーん、なるほどねえ



秋雨の貼り付いているふくらはぎ

鈴鹿洋子

スカートで外出したら、秋雨にむき出しのふくらはぎが濡れてしまった。その冷たさを「貼り付いて」と実感したのだ。俳句は精神の記録ツール。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

靴下の延命治療てふ夜なべ ・・・すぐに穴あく木綿の靴下	堀川明子
大根を引いて地球に穴あける ・・・地球の雨漏りこのせいかもよ	西をさむ
乗車してホームに月を残しけり ・・・月を観るには戻らにやならん	山本 賜
台風よそりやあんまりだ壊れちやう ・・・ボロ家だとでも手加減されず	赤瀬川至安
秋うらら年をとらないサザエさん ・・・齢とらんからロングランだぜ	柳 紅生
稲藁も重宝猫の座布団に ・・・麦藁だつてストローにした	柳澤京子
いつまでも待たせて月下美人かな ・・・私は夜型待つのは勝手よ	稲沢進一
嚏して名句が雲散霧消する ・・・嚏で消えるはおそらくは駄句	下嶋四万歩
ゆく秋の満塁さよならホームラン ・・・スポーツだからハッピーエンド	荒井良明
ハロウィン日本語訳は馬鹿さわぎ ・・・季語が動くねクリスマスでも	伊藤洋二
糞虫の寡黙に建てた一戸建て ・・・寄居虫さんは借家住まいよ	井口夏子
尻出すが辛き夜寒の外廁 ・・・風邪を引くから早く済ませな	伊藤浩睦
のけ反りて日向ぼこにもストレッチ ・・・時間を無駄にしないタイプで	稲葉純子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

大空をはばたきたいか冬の蝶	相原共良
藍の華真闇にふつふつ香るかな	相原共良
ふるさとのこの径が好き青き踏む	相原共良
無位無冠自由型です文化の日	青木輝子
生身魂以下同文の日を重ね	青木輝子
未払ひの家を震はす秋の雷	赤瀬川至安
べつたら市郵便局の出張す	赤瀬川至安
茶会の菓子 <small>の</small> 落雁なりし雁の寺	荒井良明
鱸膾 <small>(すずきなます)</small> 食はんと官を辞し人よ	荒井良明
石仏の内なる魂神の留守	井口夏子
干柿の食べごろ惑うすぼみころ	井口夏子
ゆるきゃらの正味ひげ面玉の汗	池田亮二
美女礼賛老いたるヴィナスもそれなりに	池田亮二
姦しいゴルフ女子会ばった飛ぶ	石塚柚彩
紅葉晴れ水屋手伝ひ気もそぞろ	石塚柚彩
初嵐名にそぐはない秋茶花	石塚柚彩
彼岸花吾差招く案内花	泉 宗鶴
彼岸花渡ればそこは何処なり	泉 宗鶴
死人花おいでおいでの手燭花	泉 宗鶴
栗飯の飯抜きが好きこれ本音	伊藤浩睦
夜寒かな今地下鉄を入れてます	伊藤浩睦
渋柿の天辺に張る乳房かな	伊藤洋二
年の瀬や鬼籍にもある市民税	伊藤洋二
走り蕎麦カロリー不足かも知れず	稲沢進一
机には積んで置く本蜜柑むく	稲沢進一
インフルエンザの向かう三軒両隣	稲葉純子
ふうふうに鍋焼うどん責められる	稲葉純子
飛行機も車もどうぞ神の旅	井野ひろみ
イチョウの葉ナズナの真似して風に揺れ	上山美穂
枝に揺れ美 <small>(は)</small> しき落ち葉になるつもり	上山美穂
スキの穂猫じゃらしには長すぎる	上山美穂
冬の灯に遅い帰宅を咎めらる	梅岡菊子
着膨れに便乗おかわり三杯目	梅岡菊子

嘘をつくことにもなれて神の留守
 金木犀夜道の案内してをりぬ
 一枚の落葉が先客エレベーター
 古家華やぐ干柿の整列に
 秋団扇鳥獣戯画の動き出す
 足指を撫でてなだめて秋深し
 秋天の先は宇宙や航空ショー
 藤袴アサギマダラをおせつたい
 異人さん道後神輿に目をキョロキョロ
 カジキ獲る漁師は父子冬の海
 災害の墓を洗えば悴める
 大根を積み木のごとくマーケット
 鮫鱈の眼の飛び出して魚市場
 あの日より相思相愛新走
 推敲の果ての推敲夜長し
 唐辛子女の臍の曲がり方
 恙なく稲に触らず稲を刈る
 竹馬に乗って転がる文化の日
 地下鉄の出口はここよ蓮根掘る
 羽毛着て小春日和をかるがると
 捨て案山子見上ぐる空の真青かな
 鬼胡桃綺麗事では生きられぬ
 踊り子も頬杖をつきドガの秋
 運動会はしごしてゐる子沢山
 里山さんから三秋の詰め合わせ
 ありがとうとつぶやき秋の夜の床に
 新品種カタカナで言ふ秋の花
 栗寿司は子や孫にやる里の味
 子安家は子沢山にて木の子好き
 異教徒のぞくぞく来る留守詣
 葉鶏頭きつと真中が火消役
 一病と腿子脛子抱き冬至風呂
 空つ風午後から吹き出す律儀者
 「西郷（せご）どん」が一番人気案山子立つ
 読み上げて字面に非ず文化の日
 親方は口八丁や松手入
 アイドルになり損ねたる案山子かな
 プーさんの絵本に紛れちちろ鳴く
 霊境の水琴窟や水の秋

梅岡菊子
 梅野光子
 梅野光子
 梅野光子
 太田史彩
 太田史彩
 太田史彩
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡田廣江
 岡田廣江
 岡田廣江
 小川鈍太
 小川鈍太
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 桑田愛子
 小林英昭
 小林英昭
 近藤須美子
 近藤須美子
 近藤須美子
 下嶋四万歩
 下嶋四万歩
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義
 白井道義
 水夢
 水夢
 鈴鹿洋子

稼いで五十年彼岸花もそう言う	鈴木和枝
蛇の穴小虫が覗く秋日和	鈴木和枝
少々の酒で酔う一匹のコオロギ来て	鈴木和枝
礼服は貸衣装なり文化の日	高田敏男
縁日を円日に換え鯛焼屋	高田敏男
守り札巫女が売つてる神無月	高田敏男
花終我に終活子に就活	高橋きのこ
竈てふもの知らず冬の猫	高橋きのこ
捨案山子夫々似ている人のをり	高橋きのこ
秋陰の福山城郭淋しきは	田中 勇
旅人や美観地区にも秋の声	田中 勇
健康が第一と気付く暮の秋	田中 勇
婆の手に打たれてあはれ残る蚊よ	田中早苗
椋鳥の好きな住処にネオン街	田中早苗
休肝日ならば休爛冷やで呑む	田中早苗
花粉撒く豚革命果つるまで	田中晴美
南瓜切るわが握力はいかほどか	田中晴美
穂芒の穂にある命繋ぐ種	田中晴美
鯛焼の口にチューしてかぶりつく	田村米生
焼蕎麦食ふ皆善人の顔をして	田村米生
懐手融通きかぬ面構へ	田村米生
ハロウィーンや車内に集ふチビ怪獣	月城花風
扉脇海賊佇むハロウィーン	月城花風
洋梨の皮ざらざらと身のぬめぬめと	月城花風
色づきし柿のゆらゆら千鳥足	土屋泰山
一気に変身野分の悪戯で	土屋泰山
水中舞踏会くるくる木の葉	土屋泰山
その目より値段気になる秋刀魚かな	坪田節子
冬の蟬季語の季節を無視したる	坪田節子
紺碧の秋空ヒロインの気分して	坪田節子
葡萄一粒試食一房御裾分け	飛田正勝
イエスよりマリアが好きよ敬老日	飛田正勝
夫が剥き妻に炊かせる栗強飯（おこわ）	飛田正勝
十二月別れを惜しむカレンダー	西をさむ
生まれ年うやむやにして年忘れ	西をさむ
風呂上り窓をはみ出すオリオン座	花岡直樹
クラシック聴いてうとうと文化の日	花岡直樹
ビールから爛にバトンの夜寒かな	花岡直樹

秋桜の美は野を走る風の枝	林桂子
早々と冬の気分にカレンダー	林桂子
秋城山くつきり見えた目にも老ひ	林桂子
秋鯖食ぶ頤が落ちるとまで云はれ	原田 曄
秋の蚊の知己の如くにわが右手	原田 曄
新聞によく見る顔や捨案山子	原田 曄
冬の蠅地蔵のつむり借り申す	久松久子
スッピンをマスクに隠し梅田まで	久松久子
颱風の寄進の礎に八つ当たり	久松久子
冬麗パン種はちきれる寸前	日根野聖子
野外ステージの衣裳キラキラ文化の日	日根野聖子
昆虫になりそこねたか椿の実	日根野聖子
舌鼓あばたもえくぼ熟柿かな	廣田弘子
はらりと落ちる人恋ひの桐一葉	廣田弘子
日向ぼこ人の噂は馬耳東風	廣田弘子
秋を喰う何が旬やら旨いやら	細川岩男
声高に嘘吐き鳥や天高し	細川岩男
そぞろ寒頭を垂れる大企業	細川岩男
レンタルのコンバイン来て刈田かな	堀川明子
重ね着の最初一枚皮下脂肪	堀川明子
笑ふまでちょっと待っててふ通草かな	本門明男
落日に焼きあげられし鱗雲	本門明男
神無月とはいへ在す風邪の神	本門明男
秋高しドローンを見張るドローンかな	南とんぼ
Gジャンの似合う柴犬冬うらら	南とんぼ
穴まどい胃カメラは胃へするすると	南とんぼ
鬼ぐるみ肉刺使い割りにけり	棕本望生
松手入三日坊主が丁度いい	棕本望生
秋刀魚買ふ鮨にするぞと言ひ聞かせ	棕本望生
松手入お金かかると嫌はれぬ	村松道夫
胸出して愛想笑ひや愛の羽根	村松道夫
これでもか鮎つかみとる下り築	村松道夫
おでんなべお転婆となるゆで卵	村山好昭
悴みて魑魅魍魎と遊ぶかな	村山好昭
中毒の話などして河豚を食ふ	村山好昭
白足袋の馬が躓く村芝居	百千草
文化の日ヒトが地上に降り立つ日	百千草
家出してみたくなるよな小春かな	百千草

個性捨て団体戦へつるし柿

胡桃食むリスの驚く顔まねる
 賜りし天色見つめ思ふ秋
 内科医も風邪の初期には玉子酒
 スマートホンはとても物知り文化の日
 ポカしでかすポカポカの小春の日
 くるくると果物むくや小鳥来る
 枯野にて青白きインテリ風情
 極月や算盤手にし胸算用
 名湯か秘湯か悩み秋闌けぬ
 起床して気付く勤労感謝の日
 福耳を秘仏のやうに頬被り
 大穴の転がり込みし野分かな
 恍惚の死に体なりし枯蠶螂
 脳疲労寒月の句が出て来ない
 農道が散歩道なる赤蜻蛉
 新米のおかわり自由豚かつ屋
 小鳥くるデコイのような顔立ちで
 飲兵衛が新酒の出来をひとくさり
 北風を従者とするや渡来鳥（とらいちょう）
 蜘蛛の子を散らしてばかり祭りあと
 もう一度会いたい気持ち秋のバラ
 中尊寺横目で通る菊まつり
 鶴の名の長き名をよむ鶴の前
 猪の実行支配街なかへ
 パソコンにクリックをして月見かな
 松茸の代（しろ）秘めしまま柁ゆく
 実南天ひと粒ごとに雫持つ
 背伸びしてみる小春日の大道芸
 みそ汁の葱を摘みとる百舌の朝
 落ちる時期知っているらし銀杏の実
 庭の柿視線感じて色を増し
 草紅葉色々ありて障子絵に
 つつがなきご退位祝ぎ菊薫る
 「お好きでしょう」マイク譲らる年忘れ
 手でほぐす寒肥手馴れの妻がいる
 稲屑火（いなしび）を憎む田舎の暮らしかな
 熱高き寝息見守る秋灯下
 伴奏のピアノを秋に急かされる

森岡香代子

森岡香代子

森岡香代子

八木 健

八木 健

八木 健

八洲忙閑

八洲忙閑

八洲忙閑

八塚一青

八塚一青

八塚一青

柳 紅生

柳 紅生

柳澤京子

柳澤京子

柳村光寛

柳村光寛

柳村光寛

山下正純

山下正純

山下正純

山本 賜

山本 賜

横山喜三郎

横山喜三郎

横山喜三郎

横山洋子

横山洋子

横山洋子

吉川正紀子

吉川正紀子

吉川正紀子

吉原瑞雲

吉原瑞雲

吉原瑞雲

渡部美香

渡部美香

渡部美香